

Title	王朔小説序論：スタイルの変遷と第一次王朔現象を中心に
Sub Title	Exploring the work of Wang-Shuo : stylistic variations and media perspectives
Author	吉川, 龍生(Yoshikawa, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2003
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.84, (2003. 6) ,p.147(96)- 162(81)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00840001-0162

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

王朔小説序論

——スタイルの変遷と第一次王朔現象を中心に——

吉川 龍生

1. はじめに

中華人民共和国（以下、中国）において文化大革命終結後に展開した文学活動を一般的に「新时期文学」⁽¹⁾と呼ぶ。その「新时期文学」の作家の中で、とりわけ異彩を放つ作家に王朔がいる。口語や俗語を大胆に取り入れ、改革開放政策で登場した新しい現象や人物像を描くその小説のスタイルをはじめ、作家協会に依存しない創作活動やテレビ・映画との密接な関係、突然の断筆と数年後の復活など、小説のみならずその生き方にまで及ぶ多方面で賛否両論の議論を巻き起こしてきた。

とりわけ、1989年の「天安門事件」をはさんだ前後二度にわたって人気が高潮期が出現し、それが「王朔熱（ブーム）」、「王朔現象」などと呼ばれて大きな社会現象にまでなった。最初の「王朔現象」は、1988年に王朔の小説が相次いで4篇も映画化され、翌年にかけて劇場公開されて大きな話題になったものである。これを本稿では「第一次王朔現象」と呼ぶ。この「第一次王朔現象」では、業績不振にあえいでいた映画界が観客を映画館に呼び戻すための切り札として、とりわけ都市の若者の中に多くの読者を持つ王朔に目を付けたもので、王朔自身は受動的な立場にあったことが特徴として指摘できる。

その後、4篇の映画化で映画界と強いつながりを持つことになった王朔は、テレビドラマの分野にも進出し、1989年には自ら「海馬影視創作中心」を設立し、『渴望』（1990年）、『編輯部的故事』（1991年）とテレビド

ラマでもヒット作を送り出した。続いて、1992年には、テレビドラマ『愛你没商量』が中央電視台に350万元の高値で売れて話題となり、『王朔文集』全4巻（華芸出版社）や王朔が自分自身を語った『我是王朔』（国際文化出版社）が出版されると、賛否両論の大きな議論を巻き起こした。これを本稿では「第二次王朔現象」と呼ぶ。「第二次王朔現象」の特徴は、王朔自身がテレビや出版などのメディアを積極的に利用して、自分自身についての議論を盛り上げていった点にある。自分への批判的な意見が議論の盛り上がりに一役買っていると見るや、知人の新聞記者に依頼して批判記事を書かせてもいる。しかし、「第二次王朔現象」が盛り上がる陰で、王朔は小説創作の危機に陥り、そのまま断筆に追い込まれる。

「第一次王朔現象」は、王朔に映像メディアとの強いつながりをもたらし、その後の金銭的な成功と創作面での大きな危機をもたらしたという意味で非常に重要である。本稿では、まず王朔小説全体のスタイルの変遷について分類し、その上で「第一次王朔現象」の形成過程を王朔の創作姿勢や雑誌・映画の状況から検討する。そして、「第一次王朔現象」を引き起こす原動力になった主要作品のうち、「調侃（からかい・冗談・言葉遊び）」という王朔独特のスタイルを持つ小説について、「頑主」を例に論じる。

2. 王朔小説のスタイルの変遷

王朔は1958年南京に生まれた⁽²⁾。後に家族で北京に移り住み、文化大革命の嵐が吹き荒れる首都で少年時代を過ごした。人民解放軍の衛生員をしていた1978年に処女作「等待」を発表して以来、1996年出版の『王朔文集』全4巻（華芸出版社）⁽³⁾に収録されているものだけで31篇（約160万字）の小説がある。1992年頃に断筆し、1999年には『看上去很美』（華芸出版社）で復活を遂げるが、それ以来発表された小説はなく現在に至っている。

本節では、1996年版『王朔文集』に収録されている王朔の小説群について分類整理をする。なお、王朔自身は断筆以前の小説について次のよう

な分類をしている。

《等待》《海鸥的故事》《长长的鱼线》《空中小姐》……尤其是前三篇。一言以蔽之：中学生作文。

（「等待」，「海鸥的故事」，「長長的魚線」，「空中小姐」……とりわけ前の三篇については，一言で言えば「中学生の作文」だ。）⁽⁴⁾

早期是《空中小姐》、《一半是火焰一半是海水》和《浮出海面》，这几个言情的算第一阶段。/从《橡皮人》开始，温情的东西少了。在张璐这个形象上还有点儿。到《顽主》就没有了。/《顽主》开始调侃。接着是《一点正经没有》，《千万别把我当人》，这算第二阶段吧。……第二阶段就是调侃。包括《编辑部的故事》这类东西，都是1989年以前的。1989年初，2月份把《千万别把我当人》寄出去后，我就不再调侃了。……打1990年开始，我要展开大规模“言情”行动。

（早くは「空中小姐」や「一半是火焰一半是海水」，「浮出海面」といった，これらいくつかの「言情（恋愛）」小説が第一段階。/「橡皮人」から，温かみのあるもの〔恋愛：引用者〕が少なくなった。張璐〔「橡皮人」の登場人物：引用者〕の人物像にはまだいくらかあるが。「頑主」になるとなくなってしまった。/「頑主」から，「调侃（からかい・冗談・言葉遊び）」小説をはじめた。続くのは「一点正经没有」，「千万别把我当人」で，これが第二段階。……第二段階は「调侃」小説。「編輯部の故事」のたぐいも含めて，すべて1989年以前のものだ。1989年初，2月に「千万别把我当人」を〔出版社に：引用者〕送ってしまってから，もう「调侃」小説は書かなくなった。……1990年からは，大規模な「言情」運動を展開しようと思った。）⁽⁵⁾

しかし，王朔が自分自身や自分の創作について語る場合，細部にこだわらず誇張して雄弁に語ってしまうことも多く，毎回内容が異なるなどの不正確さが指摘されることも多い⁽⁶⁾。そこで，小説の題材や主人公，構成な

どに着目して分析し、改めて分類をすると以下のようになる。

まず、王朔自身が「中学生の作文」と語っている「等待」,「海鷗的故事」,「長長的魚線」についてであるが,「等待」は「四人組」が力を持っていた時代に自分の好きな本を読むことを禁じられた少女がそのような時代が早く終わるのを待つという話,「海鷗的故事」は水兵である「私」が,怪我をさせてしまった鷗を看病することを通じて鷗を愛する老人と心を通わせるという話,「長長的魚線」は水兵・劉小北が釣りを通じて子供と心を通わせる話である。これらはいずれも恋愛小説ではなく,次の「言情」小説と比べ構成も単純で題材も異なるため,「習作期」として分類する。

王朔自身が「言情」小説としている「空中小姐」,「浮出海面」,「一半是火焰一半是海水」,「橡皮人」の4篇については,主人公は全て一人称の「我(私)」になっている。「空中小姐」では,主人公が飛行機事故で亡くなったかつての恋人・王眉が別れた後も自分を愛していたことを知り救いを得,「浮出海面」では交通事故で足が不自由になった前半部の主人公が一度は別れながらもやはり結婚し,「一半是火焰一半是海水」では犯罪に手を染め恋人を自殺にまで追い込んでしまった主人公が,刑務所から仮出所した後心を入れ替えまともな人間になろうとするというものである。これらはいずれも,正業に就かない若者が荒れた生活の果てにそれなりの救いを得るという構成になっている。これらの主人公は,それぞれ倫理的・道徳的な心の葛藤を経て最終的に救いを得る状況に達しているのだが,その葛藤が一人称の主人公の回想や会話によって表現されている。「橡皮人」では,王朔自身も語っているように恋愛の要素が少なく,主人公は人格が崩壊していくばかりで救いもないが,冒頭の「一切都是从我第一次遗精时开始的(全ては私の初めての夢精から始まったのだ)」というところから「任何人哪怕是白痴也能一眼认出我的非人(どんな人も,たとえ白痴であっても一目で私がろくでなしであることが分かるだろう)」という自意識に至るまでの主人公の心の葛藤が一人称の主人公の口を通して語られる。このようにいずれも一人称の主人公が登場し,恋愛や生き方について心の葛藤を経験しそれが語られていることから,これらの小説を「言情」

小説として分類することとした。

次に、王朔自身により「調侃（からかい・冗談・言葉遊び）」に分類されていた「頑主」,「一点正経没有」,「千万別把我当人」とテレビドラマ『編輯部的故事』の王朔担当分である「修改後発表」,「誰比誰優多少」,「慘然無知」についてである。まず『編輯部的故事』シリーズの作品は、王朔は1989年以前としているが、後段で示すように小説として雑誌に掲載されたのは実際には1991年以降であり、主要な登場人物も『人間指南』編集部に所属する真っ当な職業の人々であり、彼らが詐欺に遭うなど、変化の激しい社会にもまれるという展開には、「我是你爸爸」や「劉慧芳」など1990年代の他の小説に近い要素も含まれている。そのため、「調侃」後の小説との中間に位置づけるのが妥当と思われる。

「調侃」の残りの3篇のうち「一点正経没有」を除き、登場人物はすべて三人称で書かれている。「言情」では主人公がはっきりしていたが、「調侃」では主要な人物はいても、登場人物同士の会話が中心であり、一人称の主人公が登場する「一点正経没有」においても、「我」が特別な位置から心の動きを語ったり、それが全体の構成に重要な意味を持ったりすることはない。つまり一人の登場人物の内面に焦点が当てられ、それが全編を通じてのテーマとなることはないのである。また、会話を中心とする「調侃」小説で具体的にどれくらい会話が多いかの一つの目安として、小説全体の文字数に対する会話部分の文字数の比率を出してみると、「頑主」が約63%、「一点正経没有」が約70%、「千万別把我当人」が約59%で、「言情」小説の「空中小姐」の約39%などと比べて明らかに会話部分が多くなっていることが分かる。王朔も「頑主」創作時にはまだ映画化されることなど想定していなかったであろうが、まるで脚本のように会話が中心で地の文は場面設定を示しているだけのようなスタイルは、映像化したいという欲望をかき立てられるテキストとなっている。

「調侃」小説以後については、先の引用でも、王朔自身「1990年からは、大規模な『言情』運動を展開しようと思った」と言うように、総じて「言情」のようなスタイルへの回帰を示していると言える。しかし、「我是

你爸爸」などは親子の交流を描いたもので「言情=恋愛」という言葉だけでは概括することはできない。むしろ、王朔自身が「我是你爸爸」を評した「深沈（深い、莊重である）」⁷⁾という言葉のほうが、時に重いテーマを扱う「調侃」以降のスタイルをよく言い当てている。したがって、本稿では「調侃」以後を「深沈」としてまとめて分類する。

以上の考察をふまえて作品群を分類し、年代順に列挙すると次のようになる。なお、『王朔文集』には所収作品の初出が記載されていないため、筆者が関係資料から整理した。ただし、一部の作品に関しては発行期が不明のため、誌名・発行年のみを示した。また、△印は『編輯部的故事』シリーズである。

【習作期】

「等待」（『解放軍文芸』1978年第11期）、「海鷗的故事」（『解放軍文芸』1982年第8期）、「長長的魚線」（『膠東文学』1984年第8期）

【言情】

「空中小姐」（『当代』1984年第2期）、「浮出海面」（『当代』1985年第6期：後に結婚して妻となる沈旭佳と共同で執筆。1988年『輪廻』というタイトルで西安電影制片廠の黄建新監督により映画化）、「一半是火焰一半是海水」（『啄木鳥』1986年第2期：同名で1988年に北京電影制片廠の夏鋼監督により映画化）、「橡皮人」（『青年文学』1986年11・12期：1988年『大喘氣』というタイトルで深圳影業公司の葉大鷹監督により映画化）

【探偵シリーズ】

「枉然不供」（『啄木鳥』1987年1期）、「人莫予毒」（『啄木鳥』1987年4期）、「人命危淺」（『藍盾』1988年）、「無情的雨夜」（『通俗小説報』1988年）、「毒手」（『警壇風雲』1988年）、「我是狼」（『熱點文学』1988年）、「各執一詞」（『文学故事報』1988年）

【調侃】

「頑主」（『收穫』1987年第6期：1988年同名で峨嵋電影制片廠の米家山監督により映画化）、「一点正経没有」（『中国作家』1989年第4期）、「千萬別把我当人」（『鍾山』1989年第4・5・6期）△「修改後発表」（『小説

家】1991年第4期), △「誰比誰優多少」(『花城』1991年第5期), △「慘然無知」(『都市文学』1992年)

【深沈】

「痴人」(『芒種』1988年第4期), 『玩的就是心跳』(作家出版社, 1989年: 単行本), 「永失我愛」(『当代』1989年第6期), 「給我頂住」(『花城』1990年第6期), 「我是你爸爸」(『收穫』1991年第2期), 「無人喝采」(『当代』1991年第4期), 「動物凶猛」(『收穫』1991年第6期: 1995年姜文により改編されて『陽光燦爛的日子』(邦題『太陽の少年』)というタイトルで映画化), 「你不是一個俗人」(『收穫』1992年第2期), 「許爺」(『上海文学』1992年第4期), 「過把癮就死」(『小説界』1992年第4期), 「劉慧芳」(『鍾山』1992年第4期)

3. 王朔小説の商品性—王朔の創作姿勢と雑誌・映画の状況を中心に

本節では, 王朔の創作姿勢とそれを支えたメディアの状況を踏まえつつ, 「第一次王朔現象」に至るまでの過程について分析する。

処女作(1978年)の執筆動機を大学入学試験準備のための作文練習だった⁽⁸⁾と語る王朔は, 1983年にそれまで勤めていた北京医薬公司を退職した。北京医薬公司の当時の月給は30元あまりで⁽⁹⁾, 1979年頃軍籍があることを利用して広州に行き電気製品のブローカーをしていた⁽¹⁰⁾という経験から, まじめに会社で働くよりもはるかに少ない労力で何十倍, 何百倍もの金を稼ぐことができることを知る身には, ばかばかしくてやっつけられないと思ったことは想像に難くない。王朔自身も「我到哪儿挣不着30多块钱? (このオレが30元ばかりを稼げないことなどあろうか?)」⁽¹¹⁾と語っている。しかし, 北京医薬公司退職後様々な商売に手を出すものの成功しなかった王朔は, 生活の糧を得るため, かつて処女作で25元の原稿料を手に入れ「簡単なことだ」と考えていた小説の創作に手を出したのである⁽¹²⁾。

我立意写小说，的确是想光明正大地发点小财。……我写小说是为我自个，要活人，要闹口饭吃。

(私が小説を書こうと決意したのは、確かに公明正大にいくらか金をもうけようと思ったからだ。……私が小説を書くのは自分のためであり、生きていき、メシを手に入れなければならないからだった。)⁽¹³⁾

このような、いわば「商品」として小説を売ろうという創作動機は、多少大げさに語っているのではないかということ差し引いても、作家といえは作家協会やどこかの「単位（職場）」に所属しそこから決まった収入を得ながら創作活動するのが常識であった当時からすれば、あまりに安易な思いつきに見える。しかし、実は当時の中国には王朔の考えを後押しするような状況も存在していたのである。それは当時の文学雑誌の創刊ブームである。『中国出版年鑑2000年版』⁽¹⁴⁾によれば、文学・芸術関係の雑誌は、1980年には256種・総印刷数25,348万冊だったものが、1985年には639種・総印刷数50,940万冊にまで増加している。また、有力な通俗文学雑誌だけを見ても、1983年ころまでには『通俗文学』（1978年）、『龍門陣』（1980年）、『啄木鳥』（1980年）、『今古伝奇』（1981年）などが相次いで創刊され⁽¹⁵⁾、文学が大量消費される時代が現出していたのである。さらには、次のような資料もある。

八四年十月、中共第十二期三中全会で決定された経済体制改革は、文学界にも思わぬ副産物を生んだ。／そのひとつが、八五年にはじまる雑誌の創刊ブームである。ブームの背景には、執筆者および読者の言論や表現の多様化への欲求がある⁽¹⁶⁾。

その結果、通俗文学雑誌だけでも、1987年には中央と各省市の文化・文芸部門の主管するものだけで60種以上が発行されるまでになった⁽¹⁷⁾のである。また、娯楽の面から見てみると、1985年時点でのカラーテレビの普及率は17.21%に過ぎず⁽¹⁸⁾、テレビの影響力もまだ現在のような強力

なものではなく、通俗文学を中心とした文字メディアが相当な影響力を持っていた時期と言える。さらには、王朔自身も語っているように、すでに1978年には「大学熱のほかに、文学熱も高まっていて、全国文学賞も出てきはじめていた。だからその頃からペンで身を立ててもよかったんだが」⁽¹⁹⁾という状況もあり、実際には王朔自身は「我是你爸爸」まで文学賞には縁がなかったが、文学賞をもらってひと儲けするということも考えられたのである。

そして、「商品」として小説を売ろうという創作姿勢の王朔に、1984年にはその成果が現れる。ブローカーなどの商売に手を出していたことで「我知道了什么好卖（何が売れるか分かった）」⁽²⁰⁾という経験を生かし「空中小姐」を執筆、雑誌『当代』1984年第2期に掲載された。既に見たように、この小説で「言情」小説という新たな境地を切り開いた。なお、雑誌『当代』は、1951年北京で設立された文学専門の国营出版社である人民文学出版社の主管で⁽²¹⁾「中国大陆仅存的数家纯文学刊物之一，发表国内作家最新的长中短篇力作（中華人民共和国にある数少ない純文学雑誌の一つで、国内の作家の最新の長中短編の力作が発表される）」⁽²²⁾雑誌であり、このような権威ある雑誌に掲載されたということで、王朔の「商品」は純文学の方面からも評価されるに至ったのである。これだけでも十分な成果といえるが、さらに同年北京電視芸術制作中心によりテレビドラマ化され、王朔の「商品」の魅力と商才が証明されたのである。

その後も『当代』や共産党青年団中央主管の『青年文学』、通俗文学のジャンルのひとつである「法制文学」⁽²³⁾の作品を主に掲載する『啄木鳥』（公安部主管）など有力な雑誌に作品が掲載され、1987年1月14日には、『青年文学』編集部と『小説選刊』編集部の共催で「王朔作品討論会」が北京で開かれている⁽²⁴⁾。

続いて『収獲』1987年第6期には「頑主」が掲載され、「調侃」小説へとそのスタイルを変貌させた。なお、「頑主」が掲載された雑誌『収獲』は、中国文壇の重鎮である巴金を主編にいただき、新中国建国後最も早く創刊された大型純文学雑誌であり、1987年第6期は創刊30周年記念号で

あった。巻頭には主編の巴金が祝辞を寄せ、続いて冰心や曹禺、劉白羽、周而復、茹志鵬、王安憶、張承志など、文壇の重鎮から現在も活躍する有力な若手まで38名にも上る作家が祝辞を寄せている。そして、王蒙、余華、格非ら並み居る有力作家たちの作品を押しわけ、祝辞の直後に続くのが、他ならぬ王朔「頑主」である。「頑主」の冒頭は「我是个作家，叫宝康——您没听说过？（ワタシ作家で、宝康って言うんだけど——聞いたことない?）」という会話から始まり、次のような作家を辛辣に皮肉る会話も書き連ねられている。

（马青）“林蓓你小心点，宝康不是好东西，你没听说现在管流氓不叫流氓叫作家了吗？”

（「林蓓気を付けろよ、宝康はろくなもんじゃないぜ。今じゃゴロツキどもを『流氓』じゃなくて『作家』って言うのを知ってるだろ。」）

（于观）“人家说自杀的办法有一百种，其中一种就是和作家结婚。”

（「自殺には百もやり方があるって言うけど、その一つが作家と結婚することなんだと。」）

このような小説が創刊30周年記念号の巻頭小説として掲載されていること自体も辛辣な皮肉になっており、当時こうした皮肉が賛否両論の反応を引き起こし、読者を引きつける話題を提供したことは想像に難くない。

そして、1988年には一挙に4本もの作品が映画化され、「第一次王朔現象」に至るのである。この映画化の背景には、芸術性を重視して撮られた映画が興行面で収益をあげることができないという当時の映画界の状況があった。『中国電影年鑑1989年版』には、「1988年プリント数ワースト10」という統計があるが、日本でも公開され話題になった『孩子王（子どもたちの王様）』（陳凱歌監督）がプリント数6本で堂々のワースト7に入っている⁽²⁵⁾。実際、1988年中に製作された作品142本のうち黒字になったのはわずか34本であった⁽²⁶⁾。また次のような指摘もある。

いわゆる第五世代の代表作といわれている陳凱歌の「黄色い大地」や、田壮壮「盜馬賊」などの映画は、芸術性も高く国際的な評価を受けているのですが、この種の映画は中国国内ではあまりお客が入らず、ごく一部の作品を除けばどれも赤字でした。こんなことでは映画の製作会社はやっていけない、なんとしても金の儲かる映画をつくれというのが、一九八八年の中国映画界の至上命令だったのです。この至上命令と王朔の作品が非常にうまく結びついたのでないかと思えます⁽²⁷⁾。

「至上命令」については、次のような王朔の言葉が参考になる。

一九八八年我有四部小说改变成电影。那一年陈昊苏当主管电影的副部长，提出拍“娱乐片”的口号

(1988年私の四篇の小説が映画化された。あの年、陳昊蘇が映画を管轄する部門の副部長をしていて、「娯楽映画」を撮ろうというスローガンを打ち出した)⁽²⁸⁾

先にも述べたように、王朔の創作は、「小説を書くのは自分のためであり、生きていき、メシを手に入れなければならない」ということがはじめにあり、その上で実績を積んできたものであって、映画界が「売れ行き」上苦境に立ち、確実に売れる原作小説を探す中で王朔に目をつけたのは当然の成り行きといって良い。その中でも映画『頑主』は1989年の「第九届中国電影金鷄獎」で6部門にノミネートされ、プリント数も1988年に映画化された他の3作より多い88本で⁽²⁹⁾、「売れ行き」上は最も良い成績を残した。こうして、王朔小説を原作とする映画が製作され、広く大衆に受け入れられ、「第一次王朔現象」という社会現象まで引き起こしたのである。このことは、王朔の創作姿勢に基づく「商品」としての小説が、映像メディアの世界でも極めて大きな魅力を備えていたことを裏付けている。

4. 「頑主」における会話について

第三節までの分析で、王朔の「調侃」小説は、王朔が小説の「商品」としての性格を追求する過程で生まれた、他の小説群とは異質で突出したスタイルであるということが明らかになった。また、その「調侃」小説の最も顕著な特徴は会話であることを指摘した。本節では、1988年に映画化された「頑主」を例に、「調侃」小説の会話とその魅力について簡単に分析する。

「調侃」小説の会話については、次の二つの大きな特徴を指摘できる。

まず第一の特徴は、そもそも「調侃」が「からかい」や「冗談」、「言葉遊び」と記されることから明らかなように、登場人物たちの表面的な会話やおしゃべりによって喜怒哀楽を表す部分である。それらの会話からは、単なる軽快なおしゃべりという印象を受ける。例えば、次のような場面である。

(杨重) “呦，怎么哭了？” 杨重弯腰看刘美萍的脸，“马青你又胡说什么惹了人家。”

(刘美萍) “我没哭。” 刘美萍抬起挂着泪痕的脸，“我没事。”

(杨) “别听马青的，他整个一个不可救药的口腔痼疾患者。”

(马青) “是是，我口臭，我那臭胳膊窝长嘴上——我说什么了？”

(「あれっ、どうして泣いてるの？」 楊重は腰をかがめて劉美萍の顔を見た。「馬青，お前また何かおかしいこと言って泣かしたろ。」

「泣いてないわ。」 劉美萍は涙に濡れた顔をあげた。「なんでもないの。」

「馬青の言うことなんか聞かなくていいよ。ヤツは救いようのない口腔下痢患者だから。」

「そうそう，オレの口は臭いのさ，口がワキガになってんだよ。— 何言わせんだよ。）」

婚約者に婚約破棄された劉美萍本人にも、慰める方の楊重や馬青にも深刻さはまるでなく、こうした会話をしただけで何事もなく過ぎていってしまうのである。「不可救药的口腔痲疾患者」というあたりには笑いを誘われるし、こういった気楽に楽しく読むことのできる部分が「商品」としての「調侃」小説の魅力でもある。

第二の特徴は、単なる「調侃（からかい・冗談・言葉遊び）」を超えて、登場人物が会話の中で自分の内面を語ってしまう部分である。これは、立場の違う人物同士が会話する場面で顕著である。例えば、

（于观）“你说我们内心痛苦？”

（赵尧舜）“当然这太明显不过了，你不说我也能感觉到。”

（于）“要是我们内心并不痛苦呢？”

（赵）“这不可能——这不合逻辑，你们应该痛苦，干吗不痛苦？痛苦才有救。”

……

（于）“听着，我们可以忍受种种不便并安适自得，因为我们知道没有完美无缺的玩意儿，哪儿都一样。我们对别人没有任何要求，就是说我们生活不如意我们也不想怪别人，实际上也怪不着别人何况我们并没有觉得受了亏待愤世嫉俗无由而来。达则兼济天下，穷则独善其身。既然不足以成事我们宁愿安静地等到地老天荒。你知道要是讨厌一个人怎么能不失礼貌地请他走开吗？”

（「オレたちの内心は苦痛に満ちているとでも？」

「当然だよ、そんなこと火を見るよりも明らかだ。キミが言わなくなっ
って感じ取れるさ。」

「もし全然苦痛じゃなかったら？」

「そんなことあり得ない—それでは理屈に合わんじゃないか、キミらは苦痛じゃなきゃならんのだ、どうして苦痛でないことがある？苦痛を感じてこそ救いがあるというもんだ。」

.....

「まあ聞いて下さい。オレたちはいろんな不便を耐え穏やかに分に安んじていることもできるんです。なぜって、完全無欠のものなんてないって知っているんです。どこでも同じってことです。オレたちは他人には何の要求もない。つまり生活が思うようにならなくても他人のせいになろうとは思わないし、実際人のせいになんてできない。だいたい虐げられたなんて思っていないから、社会に憤る理由もないんですよ。『立身出世すれば広く天下をたすけ、逆境にあっては独り自分の一身を修める』ってことです。何かを成し遂げるには不十分だというのなら、いつまでも静かに待っていたと思います。嫌いな人に礼を失しないようにお帰り願うにはどうしたらいいかご存じですか？」

この場面の後、趙堯舜は知り合いにいたずら電話をかけては相手を「クソッたれ」と罵りまくる。他人の内面を見透かして言っているかのような趙の言葉の中に、実際には于観よりよほど苦痛に満ちた自身の内面が映し出されている。一見すると表面的な言葉のやりとりの中に、登場人物の微妙な心の内が垣間見られることもあるのである。またそれは、物知り顔の年長者への辛辣な皮肉にもなっている。一方、于観は真剣に自分自身の気持ちや語っているが、このように自分たちを理解しない年長者に出会ったとき、若者たちは言葉遊びに逃げ込むことなく、自分自身を語ることもするのである。こうした側面が、当時の若い読者を引きつけていたと言える。

5. おわりに

本稿では、王朔の全体像を理解していく上で重要であると思われる「第一次王朔現象」に至るまでの過程について、王朔の全小説を分類した上で、雑誌や映画などのメディアを中心とした社会の状況をふまえて検討し、さらに「調侃」小説の会話について簡単に分析をした。

前述の通り、王朔は「第一次王朔現象」の後も精力的な活動を続け、そ

の人気は再び盛り上がりを見せ「第二次王朔現象」を引き起こした。こうした王朔の小説・映画や創作活動については、中国国内では実に様々な評価がなされてきた。その中で特に目を引かれるのは、「人文精神（の喪失）」論議⁽³⁰⁾の中で王朔の創作姿勢に伝統的な面があることが指摘されていることと、作中人物の行動の根底に中国の伝統文化を見出す議論⁽³¹⁾があることである。これらの議論の指摘する伝統が、王朔の人気の根底にある通俗文学の伝統という側面を示唆しているように思われるからである。本稿での具体的な考察は「頑主」一篇を取り上げるに止まったが、こうした通俗文学の伝統も視野に入れながら、他の王朔小説についても今後の課題として引き続き研究を進めていきたい。

注

- (1) 1989年の天安門事件や1992年の鄧小平の「南巡講話」等で「新時期文学」に区切りをつけ、それ以降を「後（ポスト）新時期文学」や「転型期文学」、「世紀末文学」、「九十年代文学」などと称することもある。本稿ではそういった分期は行わず、文化大革命終結後から現在までを指す言葉として「新時期文学」を用いる。
- (2) 一部の日本語資料で「北京生まれ」となっているのは誤り。
- (3) 1992年出版の『王朔文集』全4巻（華芸出版社）では収録篇数は24篇である。その後、1992年版は書店から姿を消し、その原因は発禁になったとも販売を自粛したとも言われているが、真相は分からない。後に収録篇数を増やして出版されたのが1996年版『王朔文集』全4巻（華芸出版社）である。
- (4) 王朔「自序」『王朔文集』（華芸出版社、1996年）、1ページ。
- (5) 王朔など『我是王朔』（国際文化出版公司、1992年）29～31、36ページ。
- (6) 陳娟「嬉笑中の清醒：王朔小説論」『上海師範大学学報・哲社版』1995年第1期、52ページなど。
- (7) 王朔など『我是王朔』（国際文化出版公司、1992年）、34ページ。
- (8) 同上、16～17ページ。
- (9) 同上、18ページ。
- (10) 同上、17ページ。
- (11) 同上、19ページ。
- (12) 同上、17～20ページ。

- (13) 王朔「我和我的小説」『文芸学習』1988年第2期, 12～14ページ。
- (14) 『中国出版年鑑2000年版』(中国出版年鑑社, 2000年), 41ページ。
- (15) 於可訓など『80年代中国通俗文学』(湖北教育出版社, 1995年), 96～110ページ。
- (16) 辻田正雄「新時期の世相と文学」『岩波講座現代中国第5巻 文学芸術の新潮流』(岩波書店, 1990年), 130ページ。
- (17) 前掲『80年代中国通俗文学』, 96ページ。
- (18) 『中国年鑑1998年版』(新評論, 1998年), 341ページ。
- (19) 王朔・石川郁「王朔インタビュー」『北京無頼』(学習研究社, 1995年), 289ページ。
- (20) 同上, 20ページ。
- (21) 『岩波現代中国事典』(岩波書店, 1999年), 593ページ。
- (22) 龍源期刊網: <http://www.qikan.com/>の解説による。
- (23) 前掲『80年代中国通俗文学』では「法律と制度を題材にした文学」と説明されているが, 犯罪とそれを取り締まる公安を題材とした小説であると考えられる。
- (24) 斯冬「在通俗与純粹之間—“王朔小説討論会”綜述」『青年文学』1987年第4期参照。
- (25) 『中国電影年鑑1989年版』(中国電影出版社, 1991年), 301ページ。
- (26) 中国研究所編『中国年鑑1989年版』(大修館書店, 1989年), 152ページ。
- (27) 戸張東夫・和田武司「第三章 王朔映画の痞子たち」『映画で語る中国・台湾・香港』(丸善, 1991年), 89ページ。
- (28) 王朔「我看大衆文化港台文化及其他」『無知者無畏』(春風文芸出版社, 2000年), 11ページ。
- (29) 『中国電影年鑑1990年版』(中国電影出版社, 1992年), 357ページ。
- (30) 宇野木洋は, 「文革後20年の文学状況を振り返る—「凝縮」と「重層化」の視覚から—」(『季刊中国』第47号, 1996年, 67ページ)の中で「人文精神(の喪失)」論議について, 「市場経済の大波の下で, 一般の人々はもとより知識人までもが, 精神的価値追求の姿勢を失っており, その復興が課題だとする主張。知識人そして文学のあり方を問う問題として賛否を呼んだ」と書いている。
- (31) 鄧曉芒「王朔与中国文化」『開放時代』1996年第1期など。

※本稿は, 21世紀COE「心の解明に向けての統合的方法論構築」プロジェクトの平成14年度研究費補助による研究成果である。